

## ベーリング海セントジョージ島周辺におけるハシブトウミガラスの採餌行動

## Foraging behavior of thick-billed murre around St. George Island, Bering Sea

# 國分 互彦 [1]; 高橋 晃周 [2]; 綿貫 豊 [3]

# Nobuo Kokubun[1]; Akinori Takahashi[2]; Yutaka Watanuki[3]

[1] 総研大・極域; [2] 国立極地研; [3] 北大・水産

[1] Polar Science, SOKENDAI; [2] NIPR; [3] Fisheries Sci, Hokkaido Univ.

亜寒帯域に生息する潜水性海鳥類は、どのように採餌潜水行動を変化させることにより、海洋環境の変動に対処しているのだろうか?このことを知るため、2004年・2006年夏季、ベーリング海南東部のセントジョージ島において、この島で多数繁殖するハシブトウミガラスを対象に、データロガーを用いた行動計測調査を行った。用いたロガーは、水温、深度、加速度を同時に計測し、記録することができる。これらの計測値により、潜水回数・深度や飛行イベントといった採餌行動に関する情報、また海表面水温(SST)や水温鉛直プロファイルといった採餌場所における海洋環境情報を抽出し、詳細に分析することが可能となる。調査結果よりまず始めにわかったことは、ハシブトウミガラスが採餌中、SSTや鉛直水温構造の異なるいくつかの海域を利用していたことである。また両年ともに、鳥が利用していたSSTの相対的に高い海域は島からの距離が遠く、顕著な水温躍層が見られること、SSTの相対的に低い海域は島からの距離が近く、鉛直混合が進んで水温躍層がほとんど見られないこともわかった。次に2年間の結果を比較すると、2004年は2006年に比べて水温は全体的に高かった。また鳥の利用していた海域の海洋環境と採餌行動を対応させてみたところ、2004年には高SST海域の利用頻度が高く、また潜水深度分布のピークが水温躍層直下の深度と一致していた。一方で2006年は島に近い低SST海域側の利用頻度が高く、潜水深度分布のピークと躍層の深度との関連性は、2004年ほど明確ではなかった。さらに雛のために持ち帰った餌の組成を見ると、2004年にはイカナゴ、タラが優占したのに対し、2006年にはイカ、カレイ、タラが優占していた。以上のことから、ハシブトウミガラスは、温暖な2004年には、発達した躍層直下で豊富な生物を主に捕食していた一方、寒冷な2006年には、躍層と無関係に鉛直分布する生物を捕食していたと考えられる。すなわちハシブトウミガラスは、年によって変化する水温構造と、それによって生じる餌生物の種組成や鉛直分布の違いの影響を受け、異なる年の間で採餌潜水行動を変化させているものと考えられる。